追悼の言葉

野上隆教授は，1991年４月に本学に着任し，社会保障論，社会福祉論等を担当されていたが，病に冒され闘病の末2004年12月に他界された。教授は優秀な研究者，教育者としてのみならず，圧倒的な存在感で私達に影響を与え続けていた。いまだに大きな喪失感にとらわれているが，『産業と経済』一巻を捧げ，ささやかな返礼としたい。

野上教授は，1969年４月に大阪市立大学経済学部に入学された。当時，全国の大学には「紛争」の嵐が吹き荒れ，大阪市立大学もその渦中にあり，教授の入学時は入学式さえ開かれない状態にあった。青森の進学校を卒業したばかりの純朴な青年であった野上先生にとってカルチャー・ショックは大きく，波に翻弄された結果，苦い「敗北」を経験された。「挫折」という言葉が流行ったように，この「敗北」に感傷的にひたり，商業化する流れさえ生じた。

しかし，野上先生は，この流れに真っ向から対立し，大学院に進学し，労働運動の歴史的，理論的分析を深める方向に向かった。運動母体のなかにある従来からの思想の批判的総括なしには，あらゆる運動は「敗北」を繰り返すだけだ，という信念が根底にあったと思われる。大学院を出て八千代学院大学を経て地元の青森大学に赴任したころから，地域の高齢者福祉問題，企業誘致問題にまで視野を拡げ，当局側の政策への批判にとどまらず，常に積極的に対案を提示されてきた。本学に着任してから研究のピッチがさらに加速し，情報システムと福祉の関連や，介護保険制度に関して現状の問題点と改革方向を明確に示し続けてきた。研究領域が多岐に拡大してきているが，これらの業績はすべて学生時代の「敗北」に対する野上先生の「反撃」であったと思われる。真面目に働いている人々が幸福になるためにはどう考えるべきか，その考えを実現するためにはどういうシステムが必要かという問題意識が，学生時代から終始貫かれていたからである。

闘病中，病床から何度もメールが届いた。人一倍負けず嫌いの野上先生が激痛を率直に告白されたことにも驚かされたが，最後の最後まで全治の意欲を揺るがせなかった精神力にはこちらのほうこそ励まされた。命は自分だけのものではなく，社会，家族のためにもっとしなければならないことがある，という使命感が生きる核にあったためであろう。思いのままにならない病気の進行に悔しくてたまらない，という涙が文面からあふれていた。

この悔しさを常に念頭に置き，先生と問題意識を共有し，私達それぞれが自ら歩むべき道を真摯に邁進することを誓い，追悼の言葉としたい。

奈良産業大学　経済経営学会長　　岩　見　昭　三